

わたしが育った東京の家

koberyo1

わたしは青森県弘前市は西茂森町の茅葺の家で生まれた。

父は長兄をたより、東京は渋谷区の幡ヶ谷へと引っ越しをした。当時、わたしは二歳だった。もちろん引っ越しの記憶はないが、東北本線の車中では、青森から上野まで泣きっぱなしでだったと、これは幼少の頃、母から聞いた話である。

大正から昭和へと年号はあらたまったものの、当時は金融恐慌のため、銀行がつぎつぎに破産し、昭和二年から六年にかけては労働争議も盛んで、不穏な空気が日本じゅうを覆っていた時代である。そんな時にわたしは生まれ、東京に職を求めた父の就職も思うようにはいかなかったようである。

この不穏な空気の流れは、大正十二年に発生した関東大震災に端を発しているのではないかと、わたしには思える。

九月一日、マグニチュード七・九の激震は、関東六県のほか、静岡、山形、長野にも倒壊の被害はおよび、さらに被害を大きくしたのは地震にともなう火災だった。関東大震災は、実に火災によって東京の七十パーセント、横浜の六十パーセントを焼き尽くしたという。

その後、ようやく地震災害からの復興の登音が聴こえるようになり、父の就職先も「K菅工株式会社」という東京ガスの下請け会社にきまり、ガスパイプの敷設の仕事をしていた。わたしが小学校に入る昭和九年頃には、家の家計もだいぶ安定するようになっていた。

さて、当時は何度か地主との折衝をかさねた結果、地主は土地を売らないというので、そのまま借地のままだったが、そこに家を建てることになった。

約八十坪の土地に標準的家族が住まう平屋建てである。

南向きの玄関に台所が四畳半、居間が六畳と、そして床の間がついたのがもう一室八畳の部屋があって、便所のまえに幅三尺の廊下がついている。

屋根は瓦の屋根だ。縁側の南向きには五メートル幅の庭があり、ひろびろとしていた。

借地に家をあらためて建てるのに三ヶ月くらいかかった。

柱は三寸五分の杉材を使用した。

「自分たちはヒノキのかおり豊かな家と思っていたらいい」と父は笑って言った。

たしかこの家、当時のお金で二千元くらいで建てられた、と思う。

父の仕事が安定しはじめていたので、月賦で支払っていたはずだ。

この頃、わたしが憶えた言葉に「ラムネ」がある。ラムネとは、炭酸飲料水の、あのラムネのことである。ラムネを飲むと「ゲップ」が出るので、ラムネという言葉とともに月賦のことも憶えたいらしい。

庭には、わたしと弟のために玄関前にブランコが取り付けられた。ブランコに腰をかけ、大きくゆすって冒険をしたものだ。

家を建ててからは、いろいろな人がきてくれた。この家は人が集まる家だと思った。この家が

らは学校にも通ったし、書道を習ったT先生のお宅も、考えてみればここから通い、映画にのめりこんだのも、たしかこの家に住んでいた時分であったと、懐かしく思い出している。

話は脱線するが、昭和二十年までの昭和前期で映画館の入場料は、おとなが二十銭、中学生以下が十銭で、映画代は当時としてはなかなか大金でもあった。というのも盛り蕎麦が三銭であったからで、それを考えれば、当時、借地の上に建てた二千円の家は大変な借金であり、父は思い切りが良かった、と思う。

その後のことであるが、母は占いごとが好きで、祈祷師を毎月呼び、定期的に祈祷してもらっていた。その他にも占い師に手相をみてもらい、先々の将来のことや、一生の健康のことなどを占ってもらったりしていた。

わたしは「当たるも八卦当たらぬも八卦」の考えでいたから、あまり本気で信用はしていなかった。しかし、占い師から手相や顔などをジッとみられて。次のようなことを言われた記憶がある。

「貴方は現在、東京に在住しているが、学校を卒業してから就職した会社で、西へ西へと住所が変わり、将来、東京に住むことには住まないでしょう。健康には留意してください。晩年は大病しますが、長生きするでしょう」と。

これを聞いた当時、わたしは東京から出るつもりはなかったので話半分、いい加減な調子で聞いていた。この占い師、嘘つきだ、と思って聞いていたのである。

これを今、振り返ってみると、この占い師の言葉通りになっているので、いささか八卦を見直している。

話をもとに戻して、部屋の間取りについてももう少し詳細に説明してみたい。

まず、玄関と台所の間には二畳の畳の部屋があって、ここで食事を摂ることもあった。

玄関はコンクリートの靴脱ぎになっていた。それから玄関には下駄箱があって、その下駄箱の上に鳥籠があり、二羽のカナリヤを飼っていた。

カナリヤはわたしが世話をした。また、庭の南東の隅では鶏を飼った。

雄鶏を一羽に、雌鶏を四羽、飼い、毎日温い卵を交代で生むので、朝食の卵かけご飯は欠かすことはなかった。この飼育もわたしの担当になった。

わたしが小学生高学年になるにしたがい、父はシェパード犬を飼いはじめた。犬の世話は大変で、朝の散歩から小屋の清掃までさせられ、小学生だったわたしは持て余した。これは父の担当でなければ、とてもとてもやってられない、と思った。

庭ができたので可能なこと、それからさまざまな選択肢がまえにひろがった。植木もふえ、じつにたのしい庭になった。

奥の八畳の間には床の間がついていて、四季の折々に掛け軸を変えていた。ある日のこと、わたしの教育のためだとし、そこに父の発案で一幅の掛け軸を掛けることとなった。その掛け軸は、まさに父からの贈り物だったが、しか、当時のわたしには一読して読めない漢字ばかりである。それは「教育勅語（きょういくちよくご）」をしるした掛け軸だったのである。小学生の三、四年生頃であったかと思うが、全文を記憶した。

授業はわけがわからなくても丸暗記ということが多かった。最近では丸暗記の弊害が叫ばれて久しく、どうも流行らないようで、理解を伴わない丸暗記は不合理のきわみのような扱いだが、わたしはそうは思わない。実際は効果があると、わたしなどは思うのだ。『読書百遍（ひゃっぺん）意（い）自（おの）ずから通ず』というぐら이다。古来より、丸暗記の功德が説かれてきたようにも思うが、どうだろうか？

さて、「教育勅語（きょういくちよくご）」のことだった。

「教育勅語」は、1890年、明治でいえば23年の10月に、明治天皇が国民にたいし、教育の目的と理念を示すために発布されたものである。

わたしが小学生の頃は、「修身」という科目の授業があり、道徳的な人生行動を教えることはもちろんだが、日本の歴史、ひいては伝統を通して日本国民としての自覚を養生し、一人ひとりに人生と生き方を考えさせ、心に刻むよう教えられた。

わたしの育った家は、昭和20年3月10日、アメリカの空襲を受け、焼失した。この知らせは父からのハガキで、宍戸湖の湖畔で知った。当時のわたしは901空旭部隊の一員として活躍していた頃である。

自分の育った家が焼失したことについては、思い出がいっぱいに詰まった家がもうないのだと思った瞬間、涙が止まらなかったことを覚えている。